
小さな思い。

神谷 美琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな思い。

【Nコード】

N4736A

【作者名】

神谷 美琴

【あらすじ】

いつも店にくる少年。そして、僕。今日は一体、どんな一日になるんだろう。

「おはよう」

その一言で始まる一日。

今日もまた、新しい一日が始まろうとしている。

カーテンの隙間から差し込む光が、なんとも眩しい。
すると少年が一人、この店に入ってくる。

あの少年は、いつもここに来るんだ。

そして必ずといって僕をじっと見るの。

そんなに見られると、照れちゃうってば。

「なあ、お前。今日も元気だな」

そう言つて、彼は笑う。

優しい笑顔。

僕は、知らず知らず笑い返していた。

「あれ？また来たのかい、カイくん」

「あつ、おはようございます、店長さん。今日も来ちゃいました」

「今日もコイツに用事か？」

そう言つて、店長さんは僕を見る。

少年、カイは、コクンと頷いた。

店長さんはそれを確認すると、僕を抱き上げ外に出してくれた。

その瞬間僕は、勢いよくカイの胸へと飛び込んだ。

「おいおい」

カイは優しく抱きしめてくれる。

暖かいなあ。

「特別だからな。今日もよろしくな」

「もちろんです！いつもありがとうございます！」

「礼はいいさ。じゃあ、俺は仕事に戻るから後よろしく！」

「はい」

僕は、店に戻る店長さんに手を振った。

店長さんも、手を振ってくれる。

カイと店長さんは仲良しで、僕はトクベツらしい。
何ヶ月か前に、二人が何か話し合ってたし。

それからだよ。

僕が外に出ることになったのは。

僕には二人の話が難しいから、よくわからないんだけどね。
でも、カイは僕を必要としてくれてるみたいなの。

だから僕は、カイの役に立ちたいんだ。

着いた場所は、いつもの公園。

カイは抱いていた僕を下ろして、近くにあるベンチに座った。
僕もカイの横に座る。

「・・・はあ」

カイが小さくため息を一つ。

僕はカイを見る。

カイの見つめる先は、向かいのベンチ。

そこに座る一人の少女。

いつもそうだ。

カイは、あの女の子を見る度にため息をする。

僕はこんなカイ、もう見たくないよ。

思い切って、僕は立ち上がる。

そんな顔するのは、今日で最後だよ。

僕は走る。

あの女の子に向かって。

「おっ、おい！どこに行くんだよ！」

カイの言葉を見捨て、僕は走り続ける。

そして、勢いよく女の子に向かってジャンプ。

女の子はビックリして、僕を抱きしめる。

「えっ、あの・・・」

「ごめん！・・・大丈夫？」

「・・・大丈夫です。えと、あなたはよくこの公園に来てる人ですよね？」

「はい・・・そうですけど」

「やっぱりよかった、人違いだったらどうしようかと思っちゃった」

女の子は立ち上がり、カイを見ながら話す。
あれ？

カイだったら、どうして顔が赤いの？

「この子とよく来るの、結構見かけるから」

女の子は、僕の頭を撫でてくれる。

僕は嬉しくて、女の子の顔を舐めた。

「ふふっ、くすぐりたい。ねえ、この子は何て名前なの？」

「・・・名前はまだ無いんだ」

「どうして？」

「実は、俺が飼ってるんじゃないんだ」

そうして、カイは僕のことを話す。

僕がペットショップに売られていることを。

女の子は黙って話を聞いていた。

「だから・・・」

「じゃあ、一緒にこの子に名前を決めようよ」

「えっ？」

「だってこの子と仲がいいんでしょ？なら、名前がないと！」

僕はカイを見る。

カイも僕を見た。

カイの出した答えは・・・。

「・・・うん」

朝とは違う空気が流れる午後。

僕は、カイの腕の中で寝ていた。

昼間は走り回ったから。

それに、カイがこんなに嬉しそうなんだもん。

「店長さん。ありがとうございました！」

「どうだった？今日は」

「今日は、もうすごいですよ！あの子としゃべっちゃいました」

「そうか、それはよかった」

「それに・・・名前を決めたんです」

「名前？・・・コイツにか」

「はい」

僕は、ゆっくりと目を覚ます。

見上げればここは、お店。

そして、店長さんと話すカイ。

「この子の名前は――」

そっか、僕の話をしてるのか。

僕はやっぱり眠気に負けて、寝てしまう。

今日は本当に楽しかった。

いつもの終わりは、バイバイ。

だけど今日は「またね」だった。

また、会うんだよ。

明日になれば、また、ね。

そして、二人の恋もこれからだよ。

ま、犬の僕が言うのはおかしいかもしれないけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4736a/>

小さな思い。

2010年10月11日02時07分発行